

たかなべ むかしばなし

第一集

— 民話・伝説・物語・由来 —

ふるさとを伝える会
高鍋町教育委員会

―表紙写真― 〃石井正敏氏撮影〃

(寒山・拾得の石仏)

高鍋異色の石像で、俗に「かんかん仏」と呼ばれています。

中国における民間信仰の道教神とされます。もと串間にあったものを、秋月氏が江戸藩邸に移し、明治になって神奈川県片瀬（藤沢市）の別邸に、更に高鍋城内に移しました。

江戸麻布の藩邸にあったころ、毎夜邸内を歩き廻る怪しい者がいますので、宿直の武士が妖怪の仕業と考え、ある夜待ち伏せ一刀切りつけました。手答えはありましたが、姿は消え失せ翌日その武士は高い熱を出し石仏には刀の後が残っていました。

その後秋月家に何か異変がありますと、この傷跡がはっきりでて夜泣きし知らせるといいます。

靈験も著しく、祈願がよくかなうといわれ、年中供花がたえることがあります。

「高鍋のむかしばなし」

発刊にあたり

高鍋町教育長 岩 永 高 徳

・児湯地方の中心として栄えてきた高鍋の地には、古い時代から多くの人々が住み、生活を営んでいました。数多く残っている古墳や、その他有形無形の文化財が、そのことを物語っております。

そうした人々の間には、長い歴史の中で培われた伝承、生活に根ざした故事、それぞれの場所にまつわるいわれや伝説、民話などが語り継がれてきており、昔は、父母、祖父母、近所の故老の口から、子や孫にくり返し話されてきたのであります。

しかしながら、時代の変化、推移とともに、これらのものが、語られなくなり、忘れ去られ、消えていくとしております。町内の心ある方々が従来から、これら伝承文化を何とかして残し、しっかり受けつぎ、後世に引き継がなければならないと考えてきました。

幸い、高齢者ボランティア活動として「ふるさとを伝える会」で伝承文化の収集と整理を行っていただきましたが、町内の老人会をはじめ、多くの方々からご提供いただきました。ここに発刊の運びとなりました。

一編一編、まことに興味深いものであり、笑い、悲しみ、驚きありで、味わい深いものばかりであります。

今後各家庭であるいは幼稚園、保育所、小中学校、子ども会等で活用されていけばと願っております。

又、これを契機に、埋もれているものを発掘し、第二集へ発展することを期待しております。

ここに刊行にあたり資料をいただきました方々、それぞれの役割でご尽力いただいた方々、社会教育課の各位に謝意を表し、発刊のお祝いのことばといたします。

昭和六十一年八月

はじめに

古い歴史と豊かな自然環境に恵まれて栄えてきました。高鍋地方には、祖先の手によって多くの文化が築かれ、尊い遺産として継承されてまいりました。しかし時代の流れとともにそうした遺産は、いつしか人々から忘れ去られ消えていくものもたくさんあるようです。

町でもこうした文化遺産を、子孫へ伝え残すために種々の施策の中で取り組んでいるところですが、その一環として物語りを中心とした伝承文化を残す事業として「高齢者生きがい促進事業の中で、ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」を結成して戴き積極的な収集活動が進められました。

このグループは、ボランティア活動の意義から学習され、高齢者としての生きがいの一つとして収集の基礎知識、心構えを研修しそして実践されたのです。しかし頼みとする古老も数少なく、町内を足でかけめぐられ、どなたが詳しいと聞けば訪ずれての聞きとり収集がなされ、大変ご苦労があったようです。

ここに一か年間の努力が実り数十編に及ぶ物語りがまとめられ、発刊する運びとなりました。

こうしてまとめられた第一集が、各会合やお互いの交流の場でご使用になり、更に子ども会等で読み聞かせ戴き、故郷のよさをお互いに確認しあいながら、後世に伝えていくならば……と期待しているところです。

の外にもまだまだ埋れているものが、残されているに違いありません。今回を契機として今後も引き続き収集を進め、第二集、第三集と続刊していきたいと思います。

最後に収集に、ボランティア精神を多いに発揮して苦労された「ふるさとを伝える会」の皆さん、また資料を提出して戴いた方々に、心から感謝申し上げます、今後のご協力もよろしくお願いいたします。

「和六十一年八月

高鍋町教育委員会社会教育課長

松 井 克 興

目次

「高鍋むかしばなし」発刊にあたり
はじめに

第一部 民話の部

- 天狗松のはなし
- お仙女ぎつね
- 石の経文
- ひょうすんぼの謀りごと
- 天狗の騒音
- 米べと芋べ
- 洗橋下の怪「米ときチンジョキジョキ」
- 法印さんが狐に化かされた話
- 狐の仕返し
- おるかおるか
- お鶴が滝
- 大きな大きな大根の話
- 河童の腕
- 竜の絵
- ひょうすんぼ石

第二部 伝説・昔ばなしの部

- 大宮神社と大寺与惣右衛門
- 順礼堂権現の物語
- 柔道の大家・山名熊四郎重広のこと
- 怪力・力士名貫川
- 狐にたぶらかされた両医
- 耳切り・血の池の話
- 片びんおとしの松
- 直五郎さんの潜水機
- 大竜寺の宝もの
- 昔、宿の坂である夜の出来ごと
- 幽霊を捕える
- 大蛇がいたはなし
- 狐に化かされたお坊さん
- 奇妙な色合いの大男
- 大蛇がいた
- 晩翠舎の松の太木に鍋のふた下がる
- 七十五日長生きする

第三部 由来・昔・思い出の部

- 地名鳴野の由来
- 地名お屋敷について

○木彫・薬師如来

○覚照寺の由来

○宮田・潮垂権現のこと

○中尾・お大師さん

○上永谷〃かがや〃行事

○蚊口浦むかしの思い出

○萩原の昔と今

○鳴野のむかし

○比木神社お里まわり

○青木の稲作・大溜池の始末

○竹鳩のむかし

○新山のおもかげ

第四部 わらべうた

○羽根つきうた ○羽根つきうた

○おじゃみうた ○おじゃみうた

○まりつきうた ○まりつきうた

○手あそびうた

○手まりうた

編集後記

協力者氏名

天狗松の話

小丸 黒 木 文 子

昔、小丸に河野五兵という人が住んでいました。お嫁さんとの間には、五才になるとも元気な男の子がいました。

ある日のことです。その男の子が、急にだだをこねはじめ、大声を張り上げて泣き出し、いつまでたっても泣き止みませんでした。お母さんは大変困って、あやしたり、すかしたりしましたが、それでも泣き止めません。お母さんは、もうたまらなくなつて、外へつき出し、戸をピシャリと閉めてしまいました。

男の子は、なおもしきりに泣いていましたが、しばらくすると、泣き声がだんだん遠ざかっていくので、不思議に思い、戸を開けて外に出てみました。

ところが、どうしたというのでしょうか。男の子は庭先の大きな松の木の上におり、シクシクと泣いているではありませんか。お母さんは大変びっくりして、松の木にかけより、手をさしのべながら

「早く、おりてお出で、そんな高い所にのぼっていると、落ちて死んでしまうよ」

と、いいますと、不思議なことに、子どものいるところあたりで、何か黒いものが、ムクムクと動き出したかと思うと、子どものつけ紐みたいなものが、スルスルとさがって来ました。

お母さんは、驚きましたが怖さも忘れて、
「早くおいで、早くおりておいで」



と、叫びながら、そのつけ紐をつかもうとしました。するとそのとたんに、真黒な物と、男の子は、空高く飛

び上って、またたく中に見えなくなってしまいました。

しかし不思議なことに、男の子の泣き声は、いつまでもたっても聞えてくるのです。お母さんの手には、ちぎれた紐だけが残ри、あまりの出来ごとに涙も出ず、ただぼんやりとつつ立っているのです。ようやく氣をとりなおした時は、涙がボロボロと流れ出るだけでどうすることもできませんでした。

丁度その時です。出かけていた五兵さんが帰って来ました。家の中にだれもいないので、大声を出しながら呼んでいきますと、裏の畑の方から、お嫁さんの弱々しい声がして、泣きながら、家の中へ入ってきました。

そして、五兵さんにすがりつくなり、烈しく泣きながら、今までのことを話しました。話をきいた五兵さんの驚きは大変なもので、顔は青ざめ、口をきくことも出来ませんでした。

月日のたつのは早いもので、その日から三年たったある日の朝のことでした。お母さんが、裏の畑で野菜をとっていますと、

「お母さーん、お母さーん」

と高い、高い、空の方から、自分を呼ぶ声が、聞えてくるのです。お母さんはびっくりして、空の方を見上げますと、中天に可愛がっていた、自分の子どもが浮んでい

るのです。

お母さんは、思わず

「あゝ、お帰りなさい。一体どうしていたんだね。お前が消えてしまってから、お父さんとも、どんなにか心を痛めていたんだよ。早くおりておいで」

と、呼びかけると、

「お母さん、今日はお使いにい

く途中なんです。そうゆつくりできませんよ」と、いいながら、つづけていいました。

「お母さん、もしあの松の木が枯れたら、すぐに新しい松の木を植えてください。お願いします。河野の家が続くかぎり、松の木が絶えないようにして下さい。お願いしま

す」

「では、お母さんお名残り惜しいですが、もうお別れです。また会うことは、もうできません。お母さん、いつまでも、元気に生きてください。お父さんにもよろしくいって下さい。」



お母さん、さようなら、さようなら

……」

と、言葉を残しながら、東の方をさして、飛んでいってしまいました。お母さんはもう、気が狂いそうで、東の空を、いつまでも、いつまでも見つめていたということです。

その後、河野家には、松の木が絶えないように植えられ、だれいうとなく、その松の木を天狗松と、呼ぶようになりました。

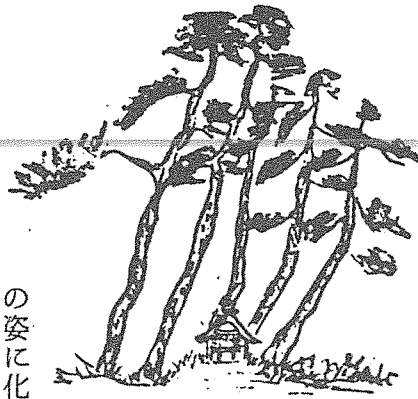
また、小丸地区では、子ども達が外で遊んでいても夕方になると、家に呼び入れて決して外に出さぬようにしましたし、又、泣かせないように注意したということです。

尚、河野家は、今の高橋洋服店の道沿いにあった家で、昭和の初め頃まで、私（黒木酒店）の家の前に、高さ二〇米にも及ぶ松の木が一本たっていました。それが天狗松だったのですが、時代も変わり、いつの間になくなり、商店街となってしまいました。

お仙女ぎつね

小丸 山名重勝筆録より

昔、水谷原から、永谷に通ずる道の、上永谷に近い所に、大きな松の老木が数本、枝を一ぱいに広げて、たっていました。道を通る人々は、夏ともなると、必らずこの老木の木かげで、休んでいくのでした。



その老木の下には
お粗末で小さな祠が
あり、土地の人々は
きつねの祠だと、い
っていました。

というのが、この付
近は、狐や狸が、娘

の姿に化けて出て、道行く人をだ

ますので、夕暮れ近くになると、子どもは勿論大人でも
通る者がなく、大変さみしい所だったからです。

ある秋の日のことです。中鶴に住む、助太郎という元
気のよい若者が、永谷から日置にかけて、魚の商売にい

った帰り道ここを通りかかりました。日も西の山に沈み
かけ、夕暮れ近くなっていたので、急ぎ足に祠の近くま
で来た時です。ふとみると、祠のかたわらに、若くて大
変きれいな娘が立っているのです。しかも助さんが、近
づいて来るのを待っている様子なのです。しかし助さん
は何くわぬ顔で、娘の前を通り過ぎようと思いました。

その時です。娘がススススッと、助さんのそばに寄
って来て、こわごわと拝むように、

「もし、もし、助太郎さん、私神祭野（こぜの）まで
行きたいのですが、もう日が暮れかっていますし、
とても寂しいので、いっしょに連れて行って下さい」
と、頼むのです。助さんは、「こ奴狐だな」と思いまし
たが、素知らぬ顔をして

「いいとも、いいとも、一しよにいくがよい」

と、快よく承知しました。

そして、娘を先に歩かせ、自分はその後から、ぼつぼ
つ歩いていきました。後からついていくうちに、知恵の
おらく助さんは、ふと、あることを思いつき、娘に話し
かけました。